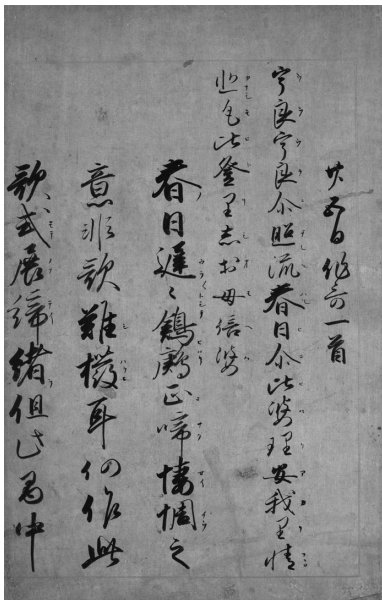
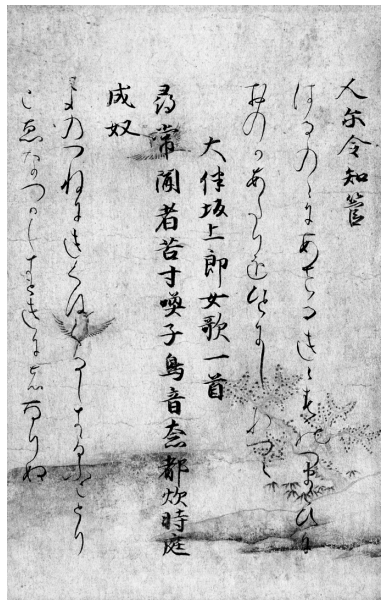


大伴家持が見た

万葉の世界

大和から越中へ

共催 高岡市万葉歴史館／日本女子大学文学部・日本女子大学文学研究科
協力 高岡市観光交流課

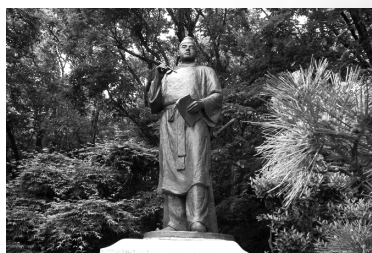


右 金沢文庫本万葉集断簡「部分」 左 万葉集梅尾類切「部分」
(高岡市万葉歴史館蔵)

奈良時代、天平十八年六月、『万葉集』を代表する歌人であり、その編纂者とも推測される大伴家持が越中国(富山県)に国守として赴任したことは、当時の都と地方との繋がりを考えさせる重要な出来事でした。『万葉集』は奈良の都を中心に広く日本の各地域の歌を掲載しているといわれるものの、越中国は、都以外の他の地域に比べて、そこでの勝れた作品群の存在が突出しています。越中国の自然の美しさに魅せられた家持は、今日「越中万葉」とも呼び慣わされている歌世界を構築し、日本文学史に残る地方を舞台とした作品群を開花させました。

高岡市万葉歴史館は、越中国守大伴家持ゆかりの高岡市によって、万葉情報の全国発信基地として平成二年十月に開館した研究施設です。『万葉集』を専門とする日本で最初の研究施設で、学術研究と一般市民への啓蒙とを二つの柱にして活動を続け、家持の越中における足跡の研究を始め、その後の『万葉集』研究を支援する重要な拠点となっています。『万葉集』を含む上代文学関係の学会の開催への協力、上代文学の専門家を招聘して毎年開催している夏季セミナー、研究書籍の刊行に加えて、図書室には『万葉集』関連の書籍・論文をほぼ網羅し、研究者・学生への便宜を図っています。博物館としても学芸員の育成に寄与し、本学の学生も実習に参加しています。

今年度末、北陸新幹線の金沢延伸によって首都圏と越中国(富山県)との距離はかなり縮まると予測されます。こうした時期的な意義もあって、高岡市万葉歴史館と共催で、首都圏に属する本学において、「家持が見た万葉の世界 大和から越中へ」と題して、都(大和)と越中の双方に視点をおいた展示を行うと共に、都人家持が見た越中の世界についての講演会を企画しました。「都と地方」という『万葉集』に関連する主題のもと、『万葉集』研究が今日的意義を持つことを明らかにするものです。



左から 高岡市万葉歴史館外観／大伴家持像(原型：米治一)／卷子本万葉集／越中国庁址碑(高岡市伏木)

日本女子大学 目白キャンパス新泉山館 国際交流センター大会議室

日本女子大学 目白キャンパス
東京都文京区目白台2-8-1 03-3943-3131 (代表)

アクセス

- JR山手線 目白駅から 徒歩 約15分／バス 約5分
- 都営バス(学05)「日本女子大学行き」(直行)「目白駅前」(2)乗車 「日本女子大前」(4)下車
- 都営バス(白61)「新宿駅西口」行き、または「椿山荘」行「目白駅前」(1・3)乗車 「日本女子大前」(5)下車
- 東京メトロ副都心線「雑司が谷」駅(3番出口) 徒歩 約8分
- 東京メトロ有楽町線「護国寺」駅(4番出口) 徒歩 約10分

